

國語讀本

高等學校用

卷一

福岡第一師範學校

(學校圖書)

登錄號 第 號

社會科學門

教育部

教授法 國語 項

目 次

全 冊 / 內第 冊

分類號 第 號

372.8

24582

T1A3

10

Ts21

4770

日十三月二十年三十三治明  
書科教用童兒科語國校學小等高  
濟定檢省部文

文學博士坪内雄藏著

國語讀本  
高等小學校用  
卷一

東京  
合資會社  
富山房藏版

圖書 和圖書 週



a 1 3 8 0 3 2 8 7 9 8 a

福岡教育大学蔵書

# 卷一 目次

第一課 大日本……………一  
 第二課 花の王……………二  
 第三課 花の構造……………四  
 第四課 素盞鳴命……………六  
 第五課 猿 橋……………九  
 第六課 木曾山中……………十一  
 第七課 野見宿禰……………十二  
 第八課 應舉と谷風(上)……………十四  
 第九課 同 (下)……………十六  
 第十課 竹……………十八

第十一課 中將姫……………十九  
 第十二課 廢物利用……………二十二  
 第十三課 牛……………二十三  
 第十四課 檢須賀たより……………二十五  
 第十五課 檢須賀造船廠……………二十六  
 第十六課 水雷の語……………二十九  
 第十七課 はけめ遊べ……………三十二  
 第十八課 蟻 蟻……………三十四  
 第十九課 小笠原島……………三十五  
 第二十課 水泳術……………三十七  
 第二十一課 おしん物語(上)……………四十  
 第二十二課 同 (下)……………四十三

注 意  
 米ノ粒  
 外ニ出  
 アモル  
 新漢字  
 谷ノク  
 ハ熱語  
 以外ニ  
 說明ヲ  
 要スル  
 語句  
 合ニ附  
 二ノ用  
 一ノ用  
 二ノ用  
 一ノ用  
 二ノ用  
 一ノ用  
 二ノ用  
 一ノ用  
 二ノ用

## 國語讀本 高等小學校用 卷一

### 第一課 大日本

我が國は、地圖にて見れば、小さき國なり。それを、大日本と呼びて、はづかしからぬわけを知れりや。  
 大とは、形の大小のみをいふにあらず。質のりばなるをこそ、まことの大小といふべけれ。人についていはゞ、善き人は、大

高等小學校用 卷一 一

腕力 優 卑

人にて、惡しき人は、小人なり。いかほど、  
躰大きく、腕力強く、身分高く、財産多く、才  
智、學問優れたりとも、心だて惡しき人は、  
小人なり、卑むべし。

國もまた、其の如し。いかほど、領地廣  
く、兵力強く、産物多く、國富み榮ゆとも、惡  
しき事を行ふ國は、小國なり、卑むべし。  
小人、惡人とは、自分勝手のみを行ふ者  
をいふ。大人、善人とは、他人を思ひやる

衰 \*

心深く、道理にあかると、勇氣ある人をい  
ふ。

世界に、國は多けれど、我が國人は、古來、  
君親を思ふ心深きによりて知られ、家國  
を思ふ心深きによりて知らる。昔の人  
は、我が國を衰めて、君子國と稱したり。

日本に生れたるを、名譽と思へ。日本  
に生れたるを、幸福と思へ。我が國は、地  
圖にて見れば、小さき國なれど、善人多く、

大人多しと褒められたる國ぞ。大日本  
と呼びても恥かしからぬ國ぞ。さりな  
がら、これをして行末長く、まことの白日  
本たらしむると否とは、ひとへに國民の  
心がけによることなるを忘るべからず。

第二課 花の王

春秋の本草の花は、數知れぬほど多け  
れど、其のうちにて、花の王と立てらる、

は、一つ二つのみなり。かゝる花、國によ  
りて、同じからず。

我が國の人は、櫻を、花の

牡丹 王と呼び、支那の人は、牡丹

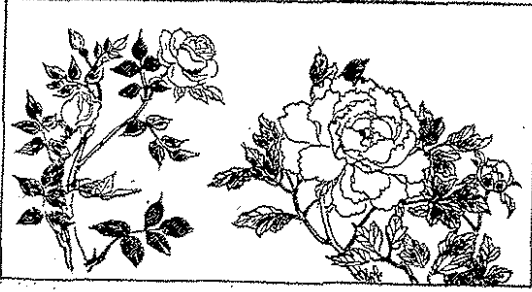
を、花の王とたどむ。西洋

薔薇 の人は、薔薇を、花の女王と

褒む。支那の人は、牡丹の、

品格 福々しくして、品格高きを

愛し、西洋の人は、薔薇の色



大日本... 富山府... 富山府... 富山府...

濃 \* 深 \* \* 苟

濃くして、かをり高きを喜ぶ。我が國の人は、櫻の、すきとほるよゝにて、あざやか  
に、潔きを好む。

支那、西洋のことは、さておき、我が國人の櫻を好むは、其の國風のおのづから然らしむるところなり。古人の歌にも、  
「しきしまの 大和心を 人とはゞ、  
朝日ににほふ 山ざくら花。」  
とあり。苟も我が國の善き人たらんを

隠 裏衣 欲

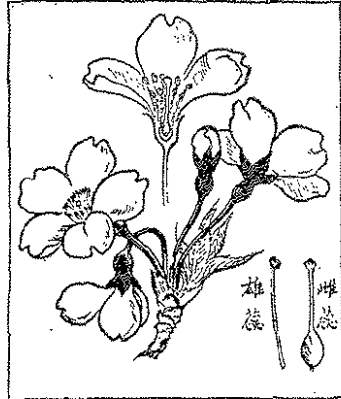


欲する者は、人の道に違ふきたなきことを惡むべし。心に裏表あることを惡むべし。口と心と違ふことを惡むべし。過つて、惡しき事をなさば、櫻の散るが如く、潔く改めんことを欲すべし。心は、常に、櫻の花の様にすきとほらせて、人に見らるゝとも、恐

れざらんことを欲すべし。此の心なき者は、眞の日本人に非ず。

第三課 花ノ構造

淡紅 構造



花ノ構造ノ精妙ナルハ、驚クニタヘタリ。試ニ、一輪ノ櫻ノ花ヲ取りテ、シラベ見ヨ。ソノ、淡紅ニシテ、美シ

新 綠 萼 蕾 雌 雄 指

キ部分ヲバ、花瓣ト云フ、其ノ數五枚アリ。花瓣ノ外部ニハ、綠色ニシテ、五ツニサケタル萼アリ。萼ハ、花ノ蕾ヲ包ミテ、風雨ノ害ヲ防グ。サテ、花瓣ノ内部ニハ、絲ノ如キ細キ莖アマタアリテ、各、其ノ頭ニ、黃色ノ小サキ囊ヲ具フ、コレヲ、雄蕊ト名ヅク。ソノ囊ニ、指ヲフルレバ、黃色ナル粉着ク、コレヲ、花粉ト云フ。此ノアマタノ雄蕊ノ中央ニ直立シテ、タバ一ツダケ、花

雌	作用	所謂 萎
<p>粉ヲ着ケザル青キ莖アリ、コレヲ雌蕊ト云フ。ソノ下部ノ、フクレタル部分ヲ、子房ト云フ。花ノ實ヲ結ブハ、コノニツノ蕊ノ作用ナリ。花瓣ト萼トハ、蕊ヲ護ル用ヲナス。</p>	<p>花、十分ニ開クトキハ、雄蕊ノ花粉、雌蕊ノ頭ニ附着ス。日ヲ經テ、花瓣ハ散リ、萼片モ雄蕊モ、萎レテ落ツ、サレド、雌蕊ノ子房ハ、後ニ殘リテ、次第ニ育チ、遂ニ、所謂サ</p>	

果實	完全	變態
<p>クランボトナル。コレ、櫻ノ果實ナリ。</p>	<p>完全ナル花ハ、草ト木トノ別ナク、イツレモ、櫻ノ花ニ等シク、花瓣、萼、雄蕊、雌蕊ノ四部分ヲ具フ。不完全ナル花ニハ、其中、幾分カヲ缺クモノアレド、繁殖作用ニ至リテハ、大體、異ナルコトナシ。</p>	<p>第四課 素盞鳴尊</p>

あま照らす神の怒にふれ、



※ 尋 泣 ※ 瀨 送



素盞鳴尊、天を逐はれ、  
出雲の國にぞ降らるゝ。  
こゝは、山奥、籬の川上。  
瀨の音すこきがけぎはに  
ぢゝばゝ、少女をかき抱き  
聲をかぎりに泣き居たり。  
尊立ち寄り、何事と  
尋ねたまへば、ぢゝばゝが  
語るこしかたあはれなり。

誅 哀 ※ ※



この老夫婦、八人の  
子をもちけるが、七人は、  
この奥山に、年經たる  
八またのをろぢにとりくはれ、  
残るひとりも、この夕べ、  
とられんとする哀れさま。  
尊、委細を聞きしめし、  
我れ、その大蛇を誅せん。と、  
やがて、八つの大瓶に、

※ ※ ※



酒なみくとたへさせ、  
けには、姫を坐らせて、  
尊は、かげにひそみゐて、  
大蛇おそしと、待ちたまふ。  
暮るゝも、早き奥山かけ、  
風なまぐさく吹き起こり、  
雨、すさまじく降りいづる。  
折しも、かなたの谷間より、  
鏡とかゞやくをろちのまなこ、

※ ※ 姫 ※



雲まき起こし、近づけば、  
尊、劍を抜きそばめ、  
身構へしてぞ、待ちたまふ。  
大蛇は、近づき、瓶にうつる。  
姫が姿をねらひつゝ、  
八つの頭をさし入れて、  
たゞ一いきにのみけるが、  
さすがに、酔うてぞ、仆れける。  
尊、すかさず、躍り出で、

新\*

劍をふるって、寸々に

斬りさきたまへば、不思議やな、

尾さきに、堅きものゝあり、

あやしと、取りて見たまへば、

明晃々たる利劍なり。

このみつるぎを、日の神へ、

御わびごとのしるしにと、

後にぞ獻じたまひける。

世に、草薙クサナギの寶劍と、

寶劍

\*

\*

晃々

\*

時

\*

\*

翼

あがめしは、このみつるぎぞ。

第五課 猿橋

外國の深山などにて、岩石峙ち、古木生  
ひ繁り、行き通ふすがもなき谷川のき  
り岸に、何十足とも知れぬ尾長猿の群り  
來りて、彼方へ渡らんとすることあり。  
翼もなく、泳ぐ術も知らぬ猿が、如何にし  
て、かゝる川を越ゆるかといふに、大かた

は、左の如くにして、渡るなり、とぞ。

彼等は、先づ、がけ際をかけめぐりて、大きな枝の、遠く、谷にさし出でたる古木を見たて、一同、其の根もとに、つとふなり。かくて、親らしき一疋の大猿が、するくと、幹をよぢて、延びたる大枝に取りつき、端まで傳ひゆきて、ぶらさがるを、手初めとし、續いて、數十疋の猿ども、皆、同じ枝を傳ひ上る。さて、その、最も先なるが、前の

端 延 \* \*

胴

垂 \*

\* \* \*

大猿の胴を抱きて、ぶら下れば、後なるが、又、來りて、其の猿の胴を抱き、同じ様にぶら下る。かくて、四番、五番、六番と上りゆきて、順々にぶら下れば、其の状、さながら、太き鎖を垂れたるが如し。

やがて、最も端なるが、身を働かせて、此の活きたる鎖をゆすり始む。ゆすることの、はげしくなるにつれて、鎖は、次第に遠くなびき、其の端、向う岸にふるゝや否

讀

本

高等科生徒用卷一

+

富山房藏版

\*

了



や端なる猿は、  
すばしこく手  
を延べて、そ  
の木の子にす  
がり着く。  
かくして、枝

より枝へ、鎖の橋かゝる。残れる猿ども、  
列をなして、この橋を渡る。渡り了れば、  
最初の大猿、つかみたる木の枝を放し、巧

録

みに身を翻せば、そのはずみにて、鎖の猿  
悉く、向う岸に移る。やがて、鎖は、下の端  
より、追々に解けて、猿ども、皆、地上におり  
たつ。之れを、猿橋といふ。

第六課 木曾山中

支那や西比利亞などには、数十里より、  
數百里に及ぶ、げ山を見ることも珍し  
からず。我が國は、土地よければ、到る處

既中

に、草木繁茂し、大概の山々は、良き材木を産す。就中、木曾山中は、材木の産地として名高し。

幽谷

信濃國の西南なる駒が嶽と御嶽との間に、二十里にも跨がるほどの深山幽谷あり、木曾谷といふは、是れなり。山中には、檜、榎、松、楨、樺等の大木、數里の間生えつづけり。日本三大林の隨一なり。毎年、春の始めと秋の末とに、伐り、筏に組み、て、

後 隨一

木曾川の上流より押し流し、水路より、尾張、伊勢、三河、遠江、武藏、下總等、十數ヶ國に送る。一年の産額數十萬圓なりといふ。

木曾山中には、景色よき處も少からず。木曾川の上流に當れる寢覺の里は、最も景色よし。木曾の懸橋なども、名所なり。

城趾

山中には、むかし、木曾義仲のこもりし城趾あり、その頃の古戰場あり。山中の

最も繁華なる地を、福島とす。塗物の産地として知られたり。

第七課 野見宿禰

野見宿禰は、垂仁天皇の御時の人にて、強力の名ありき。

その頃、當麻蹶速といふ者あり、腕力人に優れしかば、常に誇りて、世に我より強き者はあらず。若し、我が敵となる者あ

誇

\*

蹴

\* 雙方

腰

\* 堪

倒

らば、命がけにて勝負せんに、といひけり。天皇、野見宿禰を召して、蹶速と力をくらへしめ給ふ。蹶速は、宿禰の小男なるを見て、只一蹴に蹴殺さん、と思ひゐたり。雙方、場に出でて、暫くは、いどみあひしが、宿禰、すきをうかがひて、つけ入り、骨も折れよとはかり、敵の腰を蹴たりければ、蹶速、え堪へずして、うち倒れ、そのまゝに、息絶えけり。此の力くらへば、我が國相

撲のはじめなり。

天皇宿禰が大力を賞して、蹶速が領地を賜ひき。それよりのち宿禰は、朝廷に仕へたり。

殉死 奏上 不仁

當時、殉死の風習行はれけるが、宿禰奏上して、其の不仁なる由を説き、土にて作りたるものを



以て、まことの人馬に代へんことを請ひければ、天皇ゆるしたまひ、殉死の風止みけり。

第八課 應舉と谷風(上)

横綱 大關

\*

力士谷風横綱大關となりし頃、京都に圓山應舉といふ畫工ありしが、誰れいふとなく、畫は應舉、相撲は谷風、いつれも、日本一なり。と言ひはやしけり。



詩林 高橋和生 徳川 高橋和生 徳川

興行

面目  
紀念

勿論  
\*

谷風、京都にて興行中、應舉と知りあひ  
になりけるが、或時、應舉に向ひ、先生と、名  
をならべて、日本一といはるゝこと、私の  
面目ゆゑ、その紀念に、何か、あなたにかい  
ていたゞき、子孫にのこしたう思ひます  
が、承知して下さるまいか。といひけり。

應舉うなづき、それは易きことなれど、  
たゞではかゝじと、笑ひながらいへば、勿  
論、御禮はさし上げます。高をお望みな

賑

\*

されませ。といふ。いや、錢は欲しくなし。  
我れも、精神をこめて、かゝうほどに御身  
もまた、何か、精神のこもりたる報いをし  
て下され。といふ。

谷風、しばらく考へゐしが、よろしうご  
ざります。何か、工夫をいたしませう。と  
いひて、其の日は、わかれけり。

數日たちて、ある朝、應舉起きいでて、口  
すゝぎゐたりしに、忽ち、門前にすさまじ

續 木 高橋和生 徳川 高橋和生 徳川 十五 高橋和生 徳川

此響



き音して、地響障子をふるひけり。驚きて、見かへる庭口に谷風大きなる石をころがし入れたり。いふよー庭石一つ獻じたしと思ひ、此の二三日鞍馬山じいーをさがしまはり、やうく此の石をば、手に入れしゆゑ、人手を借らず、自身

汗

謝<sub>テ</sub>

にて、持参しました。これが私の精神のこもりし物。といひつゝ、汗をふきゐたり。應舉、今更の様に、その大力にあきれ、好意を謝し、いづれ、此の報いに、我れも、腕一ばいの畫をかきて、送るべし。と約束しけり。

第九課 應舉と谷風 下

そのうちに、相撲の興行すみければ、谷

贈 催促

風は江戸へ歸りけり。かくて、いつのまにか、半年もたちけれど、應舉は、畫を贈らざりしかば、たびく、書面にて、催促しけれども、まだ出來ずく。とて、贈らざりけり。

訪

その翌年、また、京都に、興行ありしかば、谷風は、其のついでに、應舉を訪ひ、先生にも似合はぬ違約。とせめければ、應舉、頭をかき、決して、打棄ておいたのではなし、その證據は、と、谷風を、畫室に案内し、押入よ

違約

彩色

り、かきそこねたる數十枚の畫を取りだして、見せけり。見れば、皆同じ弓の畫にて中には、り、ばに彩色したるも、數多ありけり。

\*

谷風、つくぐ見て、かうり、ばに出來てあるものを、なぜに、贈つては下さらぬぞ。と、不足らしくいへば、應舉、しろうどの目には、り、ばと見ゆるか知らねど、自分には、どうしても、氣に入らず、それゆゑ、今日に

是非

\*

及びしなれど、二三日の中には、是非しあ  
げる、待つて下され、といひければ、谷風は、  
名人の心掛の深く厚きに感じけり。

表装

二三日たちて、約束の如く、りばに書き  
あげて、贈りこしければ、谷風は、大きに喜  
び、念入りに表装して、家の寶となしき、と  
ぞ。

嘗

此の弓の畫は、嘗て、朝廷より、谷風に賜  
はりし弓を畫きしなり。

\*

\*

第十課 竹

竹ハ、諸處ニ産スレドモ、竹ニ、最モ適ス  
ルハ、溫暖ノ地方ナリ。ソノ成長ハ、甚ダ  
速カニシテ、一年ノウチニ、親竹ト同ジ長  
サニ達ス。四時、其ノ色ヲ變ヘザル故、常  
磐ノ松ト並ベ稱シテ、メデタキモノ、例  
ニ引ク。

滑  
空  
虛

ソノ幹ハ、細長クシテ、處々ニ節アリ。  
表面ハ、滑カニシテ、綠色ナリ。内部ハ、空

粘	粘	粘	粘
枯ル、ヲ常トス。	俗ニ根ト稱スルモノハ、真ノ根ニハアラデ、地下ノ莖ナリ。コノ莖ニハ、數多ノ	米ニ似テ、更ニ小サシ。實ヲ結ビシ竹ハ、	ト、及ビ、實ヲ結ブコトハ稀レナリ。實ハ、
		ハ小サクシテ、穂ヲナス、但シ、其ノ咲クコ	マノ如ク、並ビ通リタルスチヲ有ス。花
		葉ハ細クシテ、稻、麥等ノ葉ニ同ジクシ	虚ニテ節毎ニ、隔アリ。枝ハ、節ヨリ生ズ。

節	節	節	節
節アリテ、密接シ、ソコヨリ、細キ鬚ノ如キ	モノ叢生ス。之レヲ、竹ノ根トナス。	五六月ノ頃ニ至レバ、地下ノ莖ヨリ、芽	生ジ、土ヲ排シテ、地上ニ出ヅ、コレヲ、筍ト
		イフ。幾重トナク、薄キ皮ニテ包マル。	其ノ質軟カナレバ、煮テ、食用ニ供スベシ。
		筍成長シテ、竹トナル。	竹ノ大ナルモノハ、伐リテ、建築ノ用ニ
		供シ、或ハカケヒ、竿、籃、簾、傘等ヲ作ル。又、	

言  
水  
高  
山  
所  
藏  
版

番

祝中

小ナルモノハ、團扇、提灯、又ハ、笛、筆等ヲ造ル  
ニ用フ。近頃ニ至リテハ、竹ニテ炭ヲ造  
リ之レヲ電燈ノ心ニ用フトイフ。  
竹ノ種類ハ多シ。中ニモ、モソソハ、  
最モ大ニシテハ、チクマダケ、之レニ次グ。  
其ノ他、メダケ、カンチク等アリ。

第十一課 中將姫

むかし、大臣豊成公、

歌  
祈願

器量

※ ※ ※

子なきを歎き、祈願して、  
姫君ひとり得られけり。  
手のうちの玉と、大切に、  
よるこび育つる其のうちに、  
世はまゝならぬならひにて、  
程なく、母君うせたまふ。  
歎きの中に、経る年や、  
姫は、すぐれしおん器量。  
五つの時に、歌をよみ、

讀  
本  
高  
等  
科  
生  
活  
用  
書  
一  
冊  
二  
十  
一  
編  
山  
崎  
成  
版

雲井 繼母 赤赤 賣 伴



九歳の春は、琴の音を、  
雲井の御所の御感賞、  
名を中將とたまひけり。  
こゝに、繼母照日とて、  
心ひがめる不道人、  
姫を惡みて、さまざまに  
責めさいなみしその果は、  
ひそかに、家來にいひふくめ、  
山奥深く伴はせ、

隠 赤赤 狩



亡きものにせんわるだくみ。  
さすがに、あはれと思ひけん、  
家來は、殺し、躰にして、  
姫をば、山に隠しけり。  
人里遠き雲雀山、  
いほりのうちに、只ひとり、  
朝夕、佛を念じつゝ、  
世をしのびてぞおはします。  
或日、父上、狩に出で、

露見

蓮  
\*  
\*  
\*

はからず、姫にめぐりあひ、  
 喜び、伴ひかへらるゝ。  
 惡事露見と、繼母は、  
 毒を飲みて、ぞうせにける。  
 それより、姫は、み佛を、  
 ますく、深く信じつゝ、  
 五色の蓮の絲すぢに、  
 織るまんだらのたんせいを、  
 今に傳へて、もてはやす。

廢物  
利用

一旦

\*

第十二課 廢物利用

廢物利用とは、一旦用に立て、其のま  
 まにては、もはや用ひ難き品、又は、通例は、  
 使ひ途なしと見なさるゝ物をば、工夫し  
 て、用に立つるをいふ。

ふと考ふれば、襪タビなど、何の用にも  
 立たぬよゝに見ゆれど、其の實、西洋紙な  
 どの原料も、襪タビなれば、美しき絨毯カウチも、ま



ま、毛織物の襪褌より作らる。又、瓦斯會社にて、石炭を蒸せば、油の如き黒き汁流れ出づ。これも、ふと見れば、何の用にも立たぬよゝなれど、それを利用すれば、種々の藥品、又は、染料などを得べし。

牛、馬の骨と言へば、卑しきもの、譬にも引けど、之れを利用すれば、掃、揚、枝などを作るべし。其の他、蜂の巢よりは、蠟を製すべく、椽の下の古土よりは、火藥の原

譬

肥料採

料を得べし。要するに、藥品、砂糖、染料、肥料等のうちには、廢物より採れるもの少からず。

邊 溢用 浪費

凡そ、天地間の物に、全くの無用物はあるべからず。廢物と見ゆるものも、其の實は、人智の及ばざる邊に、用あるべし。まして、現に、使ひ途のある品は、決して、濫用し、浪費すべからず。

第十三課 牛

豚鶏

牛、馬、鶏、犬、羊、豚ノ六種ハ、最モ普通ナル家畜ナルガ、其ノウチ、廣ク用ヒラル、コト、牛ニマサルハナシ。

牛ハ、黒、アメ、ブチナド、毛色モイロクアリ。イヅレモ、頭ニ一対ノ角ヲ具ヘ、頸太ク、眼大キク、瞳ハ一ノ字ノ狀ヲ爲ス。齒ハ、門齒アレド、下顎ニノミアリテ、物ヲカミ切ル用ヲ爲サズ。白齒ハ大キクシ

碎

テ、其ノ面、凸凹甚ダシク、食物ヲスリ碎クニヨロシ。牛ノ蹄ハ、馬ノトハ異ナリテ、左右ニ分カレタリ、斯クノ如キヲ、偶蹄トイフ。

\*

牛ハ、草食獸ナリ。牛ハ、歩ム時ニモ、休

蓋

メル時ニモ、屢、口ヲ動カス。蓋シ、牛ノ胃ハ、四房ニ分カレタリ。最初、食物ヲ十分

吞

ニカマズシテ、第一房ニ吞ミ下シ、次ニ第二房ニ送リタルヲ、バ、再ビ、口中ニ吐キ戻

吐

高き利生御用者一  
山房藏用

シ	ル	房	駱	駝	羊	山	羊	鹿	等	ハ	何	レ	モ	反	獨	偶	蹄ノ 獸ナリ。
<p>シ、シヅカニカミ碎クテ例トス。カクスルヲ反芻ト名ツク。次イデ第三房、第四房ニ移シ、順次ニ消化ス。駱駝、羊、山羊、鹿等ハ何レモ反芻、偶蹄ノ體ハ何レノ部分モ人間ニ有用ナリ。骨ト角トハ鈿、櫛ナドニ造リ、毛ハ蒲團ノウ</p>																	

靴	滋養	* 哺育	配再慮啓
<p>チニ入レ、皮ハ靴、靴ニ造リ、血ハ砂糖ヲサラスニ用フ。中ニモ肉ト乳トハ、最良ノ滋養食品ナリ。</p> <p>牝牛ハ、四箇ノ乳房ヲ有シテ、其ノ子ヲ哺育ス。スベテカ、ル動物ヲバ、哺乳動物ト云フ。</p>			
<p>第十四課 横須賀だより</p> <p>拝啓、出立の際には、種々御配慮、ありが</p>			

二十五

たぐ御禮申上候。安着早速御知らせ申すべきはずのところ、取紛れ、延引いたし、申おけなく候。

昨日はじめて、父に連れられ、市中を見物いたし候。土地は、案外にせまう候。鎮守府チヌウの所在地だけに、ぎやかにて、西洋風の雜貨も、處々の店に見え候。午後、父の知人某氏を、鎮守府に訪問いたし、それより、同氏の案内に

終

\* \*

訪問

規模

\*

観覽

て、造船廠を一覽いたし候。當造船廠は、規模壮大、日本第一の造船所たるに恥ぢず候。別紙にしたゝめおき候。同廠觀覽記事御一覽下されたく候。

明日より、當地の高等小學に通ひ候つもり。既に、その手續をすまし候。何分、初めての土地ゆゑ、友人も無くとかく、御地のことばかり思ひ出し、な

勿々

つかしく存じ候。諸君へ、貴兄より、よ  
ろしく御傳言なしくたされ度候。又、  
折々御通信やされたく候。勿々。

第十五課 横須賀造船廠

横須賀町の東北、軍港の附近に、建て列  
ねたる數多の建物あり、是れ即ち造船廠  
なり。

廠は、まづ、四大部に分かつべし。一は、

豫算  
保管

回

船體を造る處、二は、機械を造る處、三は、費  
用の豫算を立つる處、四は、材料を保管す  
る處なり。工場も、また、業務の種類によ  
りて、種々に分かれたり。すべて、新たに  
船を造らんとするとき、先づ、型と圖と  
を、製圖場にて製らしむるを、例とす。型  
とは、軍艦又は汽船の型なり。圖とは、附  
屬機關の圖なり。型と圖とが出来あが  
るに及びて、之れを、各工場に回はし、さて、

始めて製造に着手す。

工場は、いろくあり。

鐵を鍛ふ處あり、銅鐵、眞

鍮類を鑄鑄する處あり、

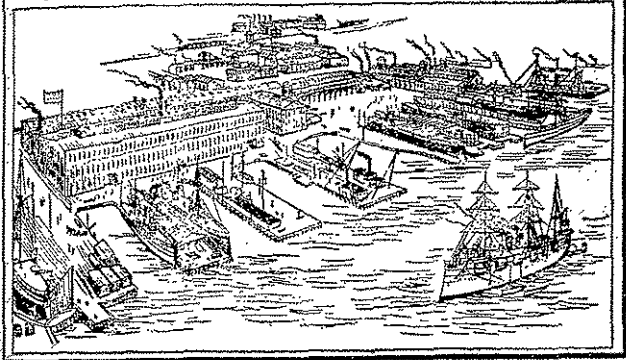
汽罐、烟突等を造る處あ

り、木製の器械を製造す

る處などもあり。構内

には、縦横に鐵道を敷き

たれば、運搬は、至りて自



鑄

縦横

在なり。

取りわけて、目ざましきは、鐵を鍛ふ處

なり、之れを、鍊鐵場といふ。こゝに、大な

る鐵の鏈をすゑつけたり。鐵の鏈の最

も大なるは、重さ十二噸、即ち、我が三千二

百七十六貫ほどあり。かゝる大鏈も、蒸

氣の力にて、打ちおろす装置なれば、一人

の力にて、自由に運轉することを得。こ

の鐵鏈を打ちおろすときは、地盤、激しく

\*

地盤

震動

震動す。されど、他の工場の邪魔ともな  
らぬは、地盤の堅固なる故なりとぞ。横  
須賀ほどのよき造船地は、外國にも稀な  
りとか。

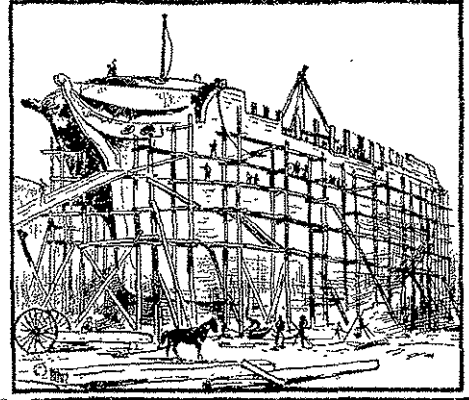
工場にては、木をひき割るも、鐵板をけ  
づるも、それに、孔を穿つも、大抵、皆、機械の  
力による。されば、工場は、どこもかしこ  
も、機械運轉の響き、鋸の音かしましく、石  
炭の烟おびたしく立ち昇る。

機

船體各部分の製造終れば、それを取り  
揃へて、船臺にて組み立つ。大砲、汽罐、橋  
など、重大なるものは、  
起重機にて、船内に積  
み込む。

船渠

工場に次ぎての見  
ものは、ドック、即ち船  
渠なり。船渠は、艦體  
の修繕、又は、船底等の塗



防

換などをなす處なり。底と周りの三方とは、石にて疊みたり。船をその内に入るゝときは、あきたる一方の水門を鎖さず。内なる水は、別に、ポンプ室ありて、そこより排出し、さて後に、工事に着手する仕組みなり。第一號船渠は、長さ六十五間半餘、幅十四間、深さ五間あり、といふ。

第十六課 水雷の話

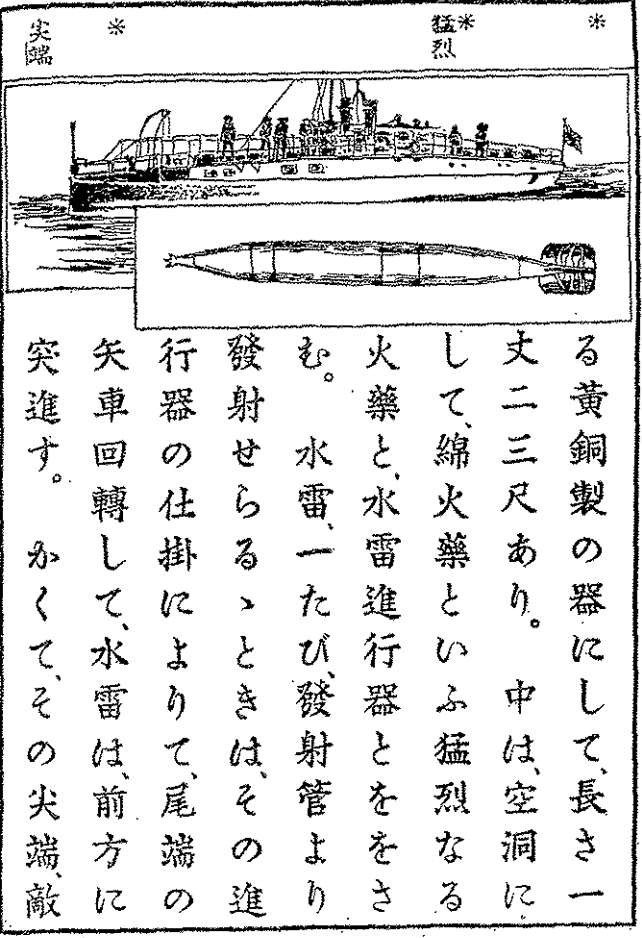
攻撃  
防禦  
水雷  
發明

機

軍艦の構造の進歩するにつれて、大砲、砲臺等の構造も、亦た、大いに進みたれど、攻撃用、防禦用の機械は、尚ほ、十分ならぬ所あるより、遂に、水雷といふもの發明せられたり。水雷には、攻撃用のものと、防禦用のものとあり。攻撃には、概ね、魚形水雷といふを用ふ。魚形水雷は、軍艦より發射し、又は、水雷艇より發射す。魚形水雷は、圖の如く、棍棒（おしぼり）の形をなせ



言  
不  
一  
山  
片



る黄銅製の器にして、長さ一丈二三尺あり。中は空洞にして、綿火薬といふ猛烈なる火薬と、水雷進行器とををさむ。水雷一たび、發射管より發射せらるるときは、その進行器の仕掛によりて、尾端の矢車回轉して、水雷は、前方に突進す。かくて、その尖端敵

衝突  
轟然  
爆發

霧

轟沈

艦に衝突するときには、綿火薬、轟然として爆發し、如何なる堅固の軍艦も、一撃にして打ち碎かる。

水雷艇は、水雷發射管を備へたる小艇にして、速力甚だ大なり。雨、雪、霧、又は闇夜に乗じて、敵艦を襲ふを役目とす。

日清戰爭の際、我が水雷艇は、闇に乗じて、威海衛に進入し、彈丸雨下の間に、定遠以下二三の敵艦を轟沈せしめき。水雷

賣  
本  
丁酉等科主吏用卷一  
三十一  
富山房版

言本 高橋科註徒用卷一 富山房藏版

危険 競争

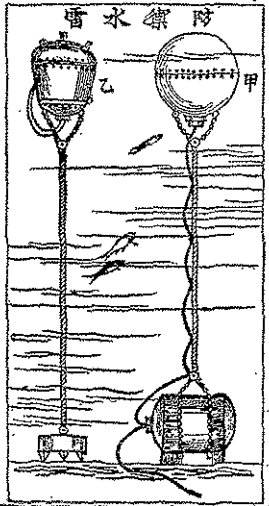
の働きの目ざましきこと、此の如し。隨うて、其の危険なること、亦た尋常ならず。水雷艇の來襲は、甚だ怖るべきものなり。故に、その近づき來るを見るや、軍艦よりは、速射砲を急射して、豫め之れを撃ち沈むるを、法とす。尚ほ、別に、水雷驅逐艇と稱するものを造りて、これに備ふ。驅逐艇は、速度殊に大にして、能く、水雷艇と競争す。艇中には、數多の速射砲を備

※

退 進行標

へて、敵の水雷艇を撃ち退くる用に供す。防禦水雷といふは、港に進み來る敵艦を破る為めのものなり。多量の爆發藥を容れたる鋼鐵罐を、軍艦の入り來る海路に沈めおくをいふ。之れに、二種あり、一は、この罐につけたる浮標に、敵艦のふるゝとすぐに爆發するも

※



躊躇

の、一は、敵艦、罐の上を通るとき、罐につけ  
たる電線によりて、陸より、電氣を通じて、  
爆發せしむるもの、是れなり。  
敵艦が、此の仕掛を恐れ、港口に躊躇す  
る時、陸上より、盛んに砲撃して、敵艦を退  
かしむる、これを、通常の軍略とす。

第十七課 はげめ遊べ

勵むときには、よくく勵め、

濟

餘所\*

遊ぶときには、よくく遊べ。  
つとめ濟まして、遊ぶは樂し、  
遊ぶ樂しき欲しくば、勵め。  
遊ぶときには、よくく遊べ。  
遊び足らねば、氣力がちぢむ。  
怒氣離れて、愉快に遊べ。  
遊び上手は、よく勵む。  
勵むときには、よくく勵め、  
つゆも、心を散らすな、餘所へ。

\*

\*

當る仕事に、全力盡せ、

中途半ばは、遊ぶもむだぞ。

兎二足を、一度におへば、

二足ながらを、え捕らぬためし。

一つ時には、仕事も一つ、

心ちらすな、いろくくに。

時は黄金よ、上ない寶、

何の益なく過ごすは費え。

勵む仕事の、其のひまぐくに

遊べ、心をやしなふ爲めに。

第十八課 蝙蝠

＊ ＊ ＊

蝙蝠ハ、晝ハ、樹木ノウロ、物置、又ハ、屋根

裏等ニヒソメド、暮ルレバ、出デテ、空中ヲ

翔リ、飛蟲ヲアサリテ食フ。 鼯ハ、鼠ニ似

タレド、前肢ノ四指、大イニ延ビタリ。 指

ノ間ニハ、膜アリ、ソノ膜延ビテ、後肢ト尾

トニ接ス、ソノ狀、鳥ノ翼ノ如シ。 其ノ翔

鈎



リ得ルハ之レ有ルガ爲  
メナリ。  
爪ハ足ト手ノ拇指ト  
ノミニアリ形鈎ニ似タ  
リ。幼キウチ母ノ胸間  
ニブラ下ガルモ長ジテ後チ  
木ノ枝ニ吊リサガルモ皆此  
ノ鈎ニヨリテナリ。  
蝙蝠ハ夜ノ獸ニテ其ノ色モ

視官喉官 著

果物

夜ニ似合ハシク黒ズミタル茶色ナリ。  
其ノ視官ハニブケレド聽官ト嗅官ト  
ハ著ク發達セリ。故ニ目ヲ傷ケラル、  
モ尚ホ能ク物ノ有無ヲ辨ジ自在ニ衝突  
ヲサケテ飛翔スルヲ得。  
オホカウモリハ小笠原島ニ産シ専ラ  
果物ヲ食トス。其ノ形大ニシテ張レル  
翼三尺ニ餘ルトイフ。

第十九課 小笠原島

隅 總

小笠原島は伊豆八丈島の東南に在り、東京を距ること五百餘里なり。島の數八十餘、大なるを父島、母島、顰島といふ。地は、岩山多く、原野少なし。海岸は、險惡にして、船を泊するに便ならず。父島の西北隅に、二見の港あり。港内、水深く、波穩かなり、良港と稱せらる。此の島は、今より、殆ど三百年前に、小笠

開拓

\*

勸奨

\*

原貞頼の發見せし所なり。當時は、住む人の無かりしかば、無人島と稱したりき。徳川幕府屢、其の開拓をはかりて、成らざりしが、明治八年に至り、政府、こゝに、島廳を置きて、農業、漁業を勸奨し、後、また、東京府の管轄となし、更に、開拓に、力を盡しき。それより、土地、漸く開け、渡航するもの、日に加はり、現今は、人口二千四五百人に達せり、といふ。

※※

住民は内地人にあらざれば、概して、歐米、其の他の歸化人なり。食物は、甘藷、魚類、豚等なれど、内地の移住民は、米を常食とす。食品中、味の甘美なるは、海龜なり、上等の料理に用ひらる。海風強きが故に、家屋は、地を掘りて、礎を固くし、屋根及び外部は、しゝろの葉にておほふ。

氣候は、琉球に似て、稍暑し、されど、寒暑

牧畜

※  
花卉

の差甚しからねば、住みにくからず。地味は、相應に宜しくして、農業、牧畜に適す。植物は、概して、熱帶地方のものに類し、花卉に乏しからず。

産物の重なるものは、植物には、しゝろ、びんろ、芭蕉、あなす、甘藷、れもん、咖啡等あり。動物には、蝙蝠、海龜の大なるものなどあり。

第二十課 水泳術

溺	臆病	振興	※※
---	----	----	----

海國民には水泳術の心得なかるべからず。水泳の心得なくば、過ちて水に陥りたるとき、忽ちに命を失ふべく、他人溺るゝも、救ふこと能はざるべし。また水泳の心得なき者は、水に對して、臆病なるが故に、船に乗ることをきらふべく、隨うて、航海事業の振興を妨ぐる恐れあり。通商上よりいふも、國防上よりいふも、不

利といふべし。

獎勵	※	罰	懲戒	刑
----	---	---	----	---

彼の海上王と稱せらるゝ英國にては、盛んに水泳を獎勵するが故に、全國中其の心得なき者、殆ど稀なりといふ。我が國にては、昔は、水泳術を重んじ、武士にして溺死すれば、罰として其の家祿を沒收するの制を定めしところもありき。水泳術は、流れの模様と浪の質とによりて一様なる能はず。隨うて師に就い



て委しき用心を學ぶを要す。

嘗てさる處にて、水泳の演習を見しに

師範役なる人、身に甲冑を着けて、銃を肩

にし、軍扇を使ひながら、水中に入りぬ。

深さ丈餘の處に至れども、尚ほ腰を没せ

ず、恰も陸上を行くが如くなりき。やが

て、軍扇を收め、一喝すると共に、水中に没

しぬ。

かくて、數分間たてども、姿を現さず。

演習  
\* 甲冑

一喝

\* 突如  
遙如

\* \*

喝采

淺瀬

觀者思へらく、水底をくゞりぬけて、陸に  
上れるならんと。然るに、突如として、遙

かなる上流に、其の半身を現し、やがて、銃

のねらひを定めて、水上に設けたる標的

を射しに、彈丸、見事に的中せしかば、水陸

聲を揃へて喝采せり。

人々、皆思へらく、彼れは、淺瀬に立てる

ならんと。然るに、彼れは、銃を立て、高

くさゞげ、やがて、おもむろに、身を没し、始

誠\*

熟練

慢心

めたり。先づ、腰を没し、胴、胸を没し、首を没し、甲かたを没し、手さきを没し、鏡のさきわうかに、水上に残るに至りて止みき。その水の深さ、丈餘ありしなり。この人の誠まことに曰はく、水泳は、初心の間最も用心すべし。師に離れて、妄りに水に入るべからず。やゝ熟練してのちは、慢心を誠むべし。不案内の場處にては、泳ぐ勿れ。用なきに、水に入る勿れ。

\*

第二十一課 おしん物語(上)

おしんといふ少女は、或町の商家のむすめで、十歳の時、實の母に死別れた。運わるくも、後の母は、善くない人であった。おこまといふつれ子と二人で、おしんを惡み、父が留守になると、色々の無理を言つて、いちぢめる。裁ち縫ひから、拭き掃除、流し元の仕事、走り使ひまで、おしんに言ひ

不 斷	厭 盛	怨	別 邸
--------	--------	---	--------

つけ、髪も結つてやらす、粗末な着物を着せて、下女も同じ様に逐おひ使ふ。おこまは、それに引きかへて、常不斷、絹物ぐるみで、我儘勝手に遊び暮してゐる。それでも、心だてのよいおしんは、少しも怒まず、なほに、いふ事をきいて、仕へてゐた。

或時、或華族の別邸で、園遊會があつて、おしんの家へも、案内狀が來た。母親は、大悦びで、おこまが晴着にとて、新に、反物を

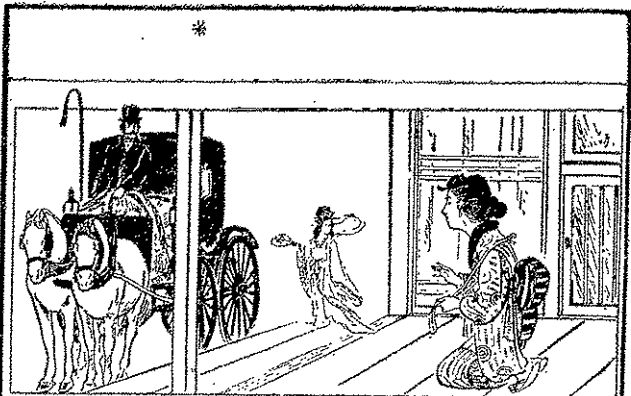
買ひ入れ、是非とも、三日の間に仕立てあげよと、おしんにいひつけた。

これは、おしんが、裁縫上手であるからでもあれど、一つは、例の難題をいひかけて、いちめるのであつた。おしんは、三日の間、殆ど寝ずに裁ち縫ひして、ちゃんと、其の日のまにあはせた。その日になると、おこまは、朝早く起きて、化粧けしょうをして、晴着を着飾おつて、母と一いしに、園遊會へ行った。お

難題

下

しんは、臺處に、只ひとり、しんほりとして、  
 雑巾をさしてゐると、どこからともなく、  
 一尺程の、小さな辨天様がはい。て来て、可  
 愛らしい聲で、おしんや、お前、園遊會へ行  
 きたくはないかえ。といった。おしんは、行き  
 たい事は行きたいけれど、行かれませぬ  
 もの。と云ふと、何の、お前、行かれますよ。と  
 いて、側の炭取を取って、馬車になれ、馬車に  
 なれ。と、扇で、ほんくと叩く、すると、炭取



が、すぐ、黒塗の馬車になった。  
 それから又、鼠よ、来い。  
 といふと、鼠が二足来た。  
 馬になれ、馬になれ。と、又、扇  
 でうつと、鼠がすぐ、馬になっ  
 た。猫よ、と、呼ぶと、猫  
 が来た。御者になれ、御者  
 になれ。と、又、うつと、猫が見  
 るまに、御者になった。

おしんは、不思議が。て、見てみると、今度  
は、おしんの着物を叩いて、帯よく、緞子  
になれ。着物よく、絹になれ。と、やはり二  
度うつ言ふと、見るく、帯は緞子に、着物  
は、上下とも絹物になった。さーよいく  
すぐに、此の馬車でお出掛。しかしどの  
様に面白うても、夕方の六時にはお歸り  
よき。と忘れまいぞ。と、いって、おしんに扇を  
渡して、馬車に乗せて、御者よ氣をつけて。

と云ふや否や、馬は、一散に駈け出した。

第二十二課 おしん物語(下)

華族の別邸では、りばな人達が、けふを  
晴れと、着飾って、澤山に集つてゐる。しかし、  
おしんの姿が、一番立ち優つて見えた。立  
ち居、振舞、言葉つかひまでが上品ゆゑ、皆  
が褒め、殊に、この家の若殿までが、大層感  
心して、特別にもてなした。

羨

願

※

おこまは、とうに來てゐたが、おしんの身なりが、あまりり。ばゆゑ、おしんとは、氣がつかず、どこのお嬢様かと、羨しさうにながめてゐた。

兎角するうちに、日が傾いて、もう六時に近い。辨天様と約束の時刻は今と思つて、おしんは、急ぎ歸らうとした。主人方も、客方も、おしんに歸られては、あとが、火の消えた様になるから、と言つて、留めるこ

奇麗

れから、色々面白い餘興があるから、皆が留めるを振り切つて歸るとして、つい、扇をばおき忘れた。

家へ歸ると、不思議や、馬車も、馬も、御者も、炭取になり、鼠になり、猫になった。着物も、もとの通りの、ぼろになつてしまつた。

二三時間たつと、おこまも歸つて來た。

おこまは、けふの園遊會は、にぎやかで、面白かつたけれど、一人、どこからか、奇麗なお

讀

本

高橋利生後集卷一

四十四

富山房藏版

嬢様が見えて、若殿にまで褒められ、大切に  
もてなされてゐたので、わたしは、羨し  
くて、くやしくて、泣きたい様であつた。とい  
ふ。おしんは、氣の毒に思つた。

さて又、華族の邸では、おしんの早く歸つたのが残り惜しいので、翌日も、つゞいて、園遊會を開き、おこま親子をも、又、招いた。おしんは、昨日の通り、臺處に、雑巾がけをしてゐると、きのふの通り、辨天様が現

惜

れて、おしんや、今日も行きたくはないか  
え。と云ふ。はい、行きたいけれど、今日は  
参りますまい。なぜなら、おこまさんが  
くやしがるのが、氣の毒であります。そ  
れに又、けふは、きつと留められて、六時に歸  
ることが出来ずまいから、といふ。

辨天様は感心して、それは、善い心がけ  
それでは、けふはおやめなさい。その代  
り、今に、褒美をやりませう。といふうちに、

見えなくなつた。

園遊會では昨日の令嬢が見えぬので、客方も主人方も失望であつた。しかしどうかして今一度逢ひたいといふので、置き忘れの扇をしるしに、町じゝを尋ねた。この扇の繪を御ぞんじの令嬢があらば、當家の若奥様に貰ひうけたい。といつて、一軒一軒に聞いて廻つたが、知つてゐる娘は無い。とらしく、おしんの家まで來た。や

四

はり、知つてゐるものは無い。

すると、臺處からおしんがきたない身なりのまゝで、出て來て、それは、波に白菊の模様でありませう。といつた。その通りであるから、びくりにして、おしんを見ると、着物は、いかにもきたない。しかし、品格といひ、様子といひ、先日の令嬢に相違ないから、早速立ち返つて、その由を傳へると、すぐに、縁談がまとまつて、おしんは、華族方



へ嫁入することになった。  
 おしんは、昨日のほろに引きかへて、け  
 ふからは、綾錦を着る身となった。しかも、  
 その錦は、六時過ぎても、翌日になっても、ほ  
 ろにかへらぬ綾錦。これが、日ごろの心  
 懸けのよい報いであつた。

國語讀本 高等小學校用 卷一 終

明治三十三年 九月廿九日印  
 明治三十三年 十月二日發  
 明治三十三年 十二月廿三日訂正再版印刷  
 明治三十三年 十二月廿六日訂正再版發行

刷 (國語讀本 高等小學校用)

卷一 定價	金拾八錢	卷ノ五 定價	金廿二錢
卷ノ二 定價	金拾八錢	卷ノ六 定價	金廿三錢
卷ノ三 定價	金貳拾錢	卷ノ七 定價	金廿三錢
卷ノ四 定價	金廿二錢	卷ノ八 定價	金廿四錢

著 作 者 坪 内 雄 藏

發 行 者 東京市神田區裏神保町九番地 合資 富山房  
 代 表 者 合資 富山房社長 坂本 嘉治 馬  
 印 刷 者 東京日本橋區樂研堀町三十三番地 仁科 衛  
 印 刷 所 同 所 厚 信 (電話浪花一四六番) 舍



發 兌 元

明治三十三年 九月廿九日印  
 合資 富山房  
 電話本局 電話 ヤマフ  
 加入 (一〇三六番) 電報 電話 ヤマフ

